

「第三回 狩野直禎先生記念 三国志学会賞」受賞理由書

三国志学会会長 石井 仁

受賞作 長尾直茂氏『本邦における三国志演義受容の諸相』（勉誠出版、2019年）

受賞理由

本著作は、日本における『三国志演義』の受容をその初発形態から明らかにし、その中心となった江戸時代における『通俗三国志』のあり方を解明し、関羽や諸葛孔明の受容に及ぶものである。

第一部「博士家と禅林における中国通俗小説受容」では、中世における「三国志」の受容が明らかにされる。羅貫中の『三国志演義』がいつ日本に伝来したのか、という問題を解決するために著された第一部では、まず第一章・第二章において、室町時代に『漢書』を題材とする通俗小説が読まれたことが明らかにされる。第三章・第四章では、中世の禅林における関羽の故事と諸葛亮像の検討を通じて、『三国志演義』受容の痕跡とは言えないながらも、『三国志演義』の世界に影響をうけたと推測される故事や人物像が、詩文や語録に見られることを指摘する。

第二部『『通俗三国志』をめぐる諸論考』は、本書の白眉である。第一章では、『通俗三国志』が湖南文山（夢梅軒章峯）の手によるもので、『大観随筆』に記されるように、弟の徽庵と共に著したと考える必要がないことを論証する。そして、湖南文山は、元禄二年四月の「通俗三国志序」が執筆された時点で、『通俗三国志』を完成していたとする。また、『通俗三国志』訳出の底本は、蓬左文庫本には特定できず、李卓吾本のどれか、さらに絞れば、書陵部本に近い本文を持つテキストであるという。第二章では、湖南文山には、「翻訳」という意識が薄く、通俗小説が俗語で書かれた通俗小説であるという意識、小説中の俗語を翻訳するという意識が希薄であったことを指摘する。それでも、翻訳が可能であったのは、禅籍、ことに語録の読解に心得があったためであるという。さらに、訳語が一定しない理由として、翻訳が文山を中心とする工房において複数の翻訳者により行われた可能性を指摘する。第三章では、「通俗」の意味を解明しながら、文山が目指したものが通俗的な歴史書であり、通俗小説を目指したものではないことを指摘する。それが、第二章で指摘される通俗小説を翻訳しているという意識の希薄さの背景にあることを明らかにする。第四章では、「通俗」の追究の中から、山東京伝が「通俗物」に拠ったとすることに注目し、江戸期の中国通俗小説受容史において、一つの受容のあり方として「通俗物」を介して作品を受容するという態度のあったことを検証する。

第三部『『三国志演義』世界の伝播と浸透』は、江戸時代の漢詩文や儒者の諸葛亮・関羽への評価を通じて、江戸期における『三国志演義』の伝播と浸透を示す。第一章では漢詩文、第二章では、絵画における江戸時代の関羽像が検討され、前者では正史、後者では黄檗宗に依拠していた関羽像が次第に『三国志演義』の関羽像へと変わっていくことを論ずる。第三章では、諸葛亮の漢詩文の分析が行われ、羽扇綸巾の諸葛亮像の普及に、『三国志演義』の影響を見る。第四章では、伊藤仁斎・東涯の諸葛亮観が「忠誠」「信義」という道徳的な側面で評価するものであったことが、第五章では、諸葛亮への批判が『三国志演義』の浸透とともに、諸葛亮を高く評価するものへと変わっていくことが論じられる。

第六章は、『三国志演義』の関羽像だけではなく、趙雲像の受容が検討され、第七章では、諸葛亮と楠正成が並べて評価される過程が論ぜられる。

以上のような三部よりなる長尾氏の研究により、日本における『三国志演義』の受容についての拠るべき水準が示されることになった。

長尾氏の「エピローグ」によれば、本著作の執筆動機は、若き日に『三国志演義』を読んで、「神飛び、魂踊り、案を拍つて怒り、杯を挙げて喜び、手の舞ひ、足の踏むところを知らず」（幸田露伴）との想いを抱いたことに胚胎するという。その『三国志演義』への愛には羨望すら感ぜられ、第三回 狩野直禎先生記念 三国志学会賞の授与に値する著作と言えよう。